平成７年10月24日第３種郵便物認可　２０１１年１月10日発行（毎月１回10日発行）・通巻２４８号

[月刊]
En-ichi 圓一
2011
1
no.248

魂の教育を実践する

インタビュー

「人格を育てる家庭」をつくるために

麗澤大学教授 水野修次郎

日本の家庭を守る教育情報誌

Contents

今月の焦点

子供に人間としての精神を伝えて、価値観、文化の伝達をして初めて親になるのです。…「自己犠牲的な愛」と言っていますが、育てる努力や犠牲を払って初めて親になるという意味です。
「人格を育てる家庭」つくるために何をすべきか　水野修次郎…6

亡くなった子どもの魂は周囲の人々の心の中に生き続けています。このことを子どもたちに伝えていけるよう医師として支援できればと考えています。
死と向きあう中で生まれる親子の絆…8

福祉大国…スウェーデンの事情はもっと深刻だ。子ども手当制度の歴史は七十年以上前にさかのぼり、戦前にはあった所得制限は今はなくなっている。…受け取る権利ばかりが一人歩きしている。
欧州子ども手当と「スウェーデンモデル」の失敗…11

知の究極的な臨界線をたどる哲学や宗教は、人間が誰でも直面せざるを得ない問題を投げかける。最も多感で、人生のあらゆる問題に疑問が噴出する大学の時期に、哲学や宗教を学ぶ意味はここにある。
哲学を学ぶ教育の土壌つくろう　野田啓介…15

3 巻頭言
新しい年に問いかける　京都大学名誉教授 渡辺久義

4 教育再生への課題と展望
子供に豊かな価値観と文化の伝達をして初めて親になる
「人格を育てる家庭」つくるために何をすべきか　麗澤大学教授 水野修次郎

8 家庭学
死と向きあう中で生まれる親子の絆

10 ワールドアフェアーズ
欧州子ども手当と「スウェーデンモデル」の失敗

12 情報ファイル
日本の15歳、「読解力」改善の兆し 国際学力テスト
小中学校のコンピュータ導入は6.4人に1台

14 オピニオン
哲学を学ぶ教育の土壌つくろう～大学は知の主戦場であれ　米UTS准教授 野田啓介

16 発言
親子の絆が子どもの社会化の力養う～子育てカウンセリング～　産業医科大学元教授 深田高一

18 病を克服した偉人たち(4) ルイ・パスツール
半身不随にも耐え抜いた「近代細菌学の開祖」　ジャーナリスト 池永達夫

20 子育ては絵本で大丈夫
他のために生きたマウイ、究極の愛　劇団天童／天童芸術学校代表 浜島代志子

21 教育・家庭情報　10代の妊娠中絶、減少の要因

22 Book Review／読者の声

24 歴史と伝統の探訪
シーボルトと日本、オランダ／長崎

巻頭言

京都大学名誉教授
渡辺久義

新しい年に問いかける

今、世界の科学者と哲学者の間で、最も深刻な問題として論争点となっているのは、この宇宙自然界の背後に知的根源を認めるか否か、科学として目的論を認めるか否か、という問題だと言ってよいと思います。これについてメディアはもちろんのこと、学界でもその主流は、あるいは表向きは、問題の存在そのものを認めようとしませんから何も起こっていないかのようですが、今、旧来の科学の前提に対する疑問が、科学者の間から内部告発のように起こっているのが事実です。これは科学を超えて文化大革命といってもよいもので、これまでの無神論的前提ではこの世界を説明できなくなった、何らかの有神論的前提が必要なのではないかという、時代の切実な要請だと言えるでしょう。

これが劇的な変化であることは私の経験からも言えることで、ほんの三〇年ほど前までは、世界の唯物論的・機械論的解釈の正当性を疑うような者は学者ではありませんでした。あるとき教室でteleology（目的論）という言葉を肯定的に解説したとき、学生がくすくす笑っていたのを覚えています。こうした変化は何となく空気として感ずるもので、現在、少なくとも敏感な学生はそんな反応はしないと思います。科学と宗教が対立するのでなく、無神論科学と有神論科学という対立があるだけだということも、最近の狂気じみた論争を通じて顕わになった事の真相です。

有神論科学というのは、無神論者が嘲笑してよく言うGod-of-the-gaps（穴埋めの神、無知を神でごまかすこと）などでなく、この宇宙自然界の背後あるいは根源に、「超知性」、あるいは人間を超えた叡智を想定した方が、新しいデータを取り込んでより合理的に説明ができ、かつ発見にもつながるという思考枠のことです。これは頑迷な守旧派が言うように、科学に宗教を持ち込むことでも、まして宗教の宣伝でもなく、むしろ本来の科学の常識に戻るということです。ただこれは、単にダーウィン以前の科学に戻るということでなく、極端な唯物論・無神論科学の不合理と行き詰まりから、これを打開すべく復活してきた思考枠であることに意味があります。

学問の世界の、いわば目に見えないところで起こっていることと実社会とは関係がないようですが、実は非常に大きな関係があります。我々の社会が神の存在を論ずることをタブーにしているのは、学界がそれをタブーにしているからで、「神」が、特殊な考え方をする人たちの特殊な話題でないことは言うまでもありません。これは我々一人ひとりの足元についた火のような問題なのです。科学者たちが歪んだ見方を自覚し、ひとたび目的論的宇宙観を取り入れるならば、社会そのものが一変するはずです。なぜなら、この宇宙に目的があるとすれば、我々一人ひとりにも、生きる目的があると考えるようになるのが当然だからです。

子供に豊かな価値観と文化の伝達をして初めて親になる

「人格を育てる家庭」つくるために何をすべきか

家庭には、良い習慣の形成と、中核となる価値を伝える役割がある。

「徳を教える第一の学校」

「家庭は、徳を教える第一の学校」―。人格教育の第一人者であるトーマス・リコーナ氏（米ニューヨーク州立大学教授）は、このように言っています（『人格教育のすべて』水野修次郎、望月文明訳／麗澤大学出版会）。

「人格を育成する家庭をつくる」という点から、家庭や学校で何ができるかを考えてみたいと思います。

参考になるのは、コミュニティ（地域社会）作りの取り組みです。私は対話によってトラブルを解決するメディエーション教育、つまり話し合うことによって、対人トラブルやもめ事を解決することに取り組んでいますが、これは対話ある家庭の育成に共通するものだと思います。

この中であげられているのは、まず「愛着」です。親と子、家族への愛着と、家族が所属する地域社会に対する愛着の形成です。マイケル・サンデル氏（ハーバード大学教授、『これからの「正義」の話をしよう』著者）も暗にこのことを指摘しています。

ところが今の日本では、家族への愛着が薄れ、同時に地域社会への愛着が薄れています。原因を一言で言えば、両親とも仕事に忙し過ぎて、子供と十分に過ごせないということがあります。大学生に聞くと家庭で一人だけで食事をしたという「孤食」を経験していた学生が増えています。家族団らんを望む子は多いのですが、実際にできている家庭は少ないですね。

次に「自由と秩序」の関係です。子供にとっては家庭でも社会でも自由のほうが楽しいでしょう。し

水野修次郎
みずの・しゅうじろう
麗澤大学外国語学部教授

米シートン・ホール大学、ジョージワシントン大学卒。高校教諭等を経て、現職。財団法人モラロジー研究所道徳科学研究センター教授。専門はカウンセリング、発達学。教育学博士。臨床心理士。日本の中学や米国の高校でもカウンセラーを務めた。著書に『カウンセリング練習帳』『争いごと解決学練習帳』他。編集翻訳書に『人格の教育』『「人格教育」のすべて』（いずれもトーマス・リコーナ著）『ゆるしの選択』（ロバート・エンライト著）。

かし自由が行き過ぎると、秩序がなくなってしまいます。逆に秩序やルールばかりだと、自由がなくなり子供は苦しくなってしまいます。子供にとって苦しいのは、悩みや失敗したことが家庭の中で言えなくなってしまうことです。

価値を伝える役割

本来、個人の自由と社会の秩序が、うまくバランスがとれる状態を保つ努力を続ける必要があります。いわば自転車が傾くことなくバランスを取りながら進むように、自由と秩序も共生関係なのです。現在の社会は、自由が多少勝って、秩序が弱くなっており、共生関係がバランスを崩しているので、住みにくい社会になっています。

三つ目は、「中核となる価値の継承」です。日本は日本の文化的伝統を伝え、コミュニティ、家族は各々が持つ価値を次の世代に伝えていく役割があるというわけです。

昔は家族の中に守るべき伝統「何々家の教訓」のようなものがありました。例えばお正月には親戚一同が集まって新年の挨拶をするといった、各家庭の伝統です。「人に絶対に迷惑をかけない」と子供に教えることもそうです。子供は親の価値や家庭の中核となる価値を伝えられて成長していくわけです。

四つ目は「対話」です。対話ができる家庭です。力や暴力ではなく、お互いに理解し合って、歩み寄っていきながら、合意を形成していく努力がそこにあるわけです。

良い親になる「十一の原理」

さて、『人格教育のすべて』では、親が良い親になるための「十一の原理」について紹介しています。

その一つに「愛情としてのコミュニケーション」という項目があります。つまり対話です。

完璧でなければ親たる人であると認められない、きちんとした子供でなければだめだというのではなく、まず愛情をもって人間の弱さや欠点を受け入れるということです。無条件に受け入れられるのが家族ですから、お互いに欠点があっても愛情で補うことができます。

親が模範になることはもちろん必要ですが、一方で過ちを許し、正すということも大切です。最初から完璧な親と子供ではなく、親になっていく人が親になる過程で子供と出会う。出会って成長して親になっていくと考えると分かりやすいと思います。

地域社会づくり、対話ある家庭育成のために大切なこと

1 「愛着」の形成
2 「自由と秩序」のバランス
3 中核となる価値の継承
4 対話ができる家庭

人格教育について親に提唱する「11の原理」

『人格教育のすべて』より

1 人格を育てることを優先する
2 権威のある親になる
3 子どもを愛す
　愛情としてのコミュニケーション、自己犠牲的な愛
4 模範となって教える
5 道徳的な環境を作る
6 直接的な指導によって、良心と習慣を形成する
7 正しい判断を教える
8 賢くしつける
9 対立を公平に解決する
10 徳を実践する機会を提供する
11 精神面での発達を促す

育てる努力や犠牲を払って初めて親になる

また、「良心と習慣を形成する」という項目があります。人格教育における家庭の役割は「習慣の形成」です。同じことを繰り返しながら良き習慣を形成していく。「おはようございます」という挨拶を毎日続けていって、初めて身に付いていくということです。

しかし、実際には家庭でできるはずの習慣の形成をやっていない家庭も少なくありません。調査してみると、親から「人に迷惑をかけてはいけない」と教えられている子供は五割ほどしかいません。あとの五割は明確に教えられていないのです。迷惑行為は「止めなさい」と親がはっきり言えばいいのですが、言葉にできる親が少ないわけです。

しかも、子供は親をモデルにして育ちます。例えば家庭内暴力がある家庭では「親は暴力をふるうもの」と教えられてしまいます。その子供が大人になれば、また暴力をふるってしまう。それも「価値観」の伝達になるわけです。虐待の連鎖とよく言いますが、どこかで食い止めなければなりません。

「井戸端会議」の時間

逆に言えば、家庭の中では良い価値観も伝わっていきます。やはり家庭の大きな役割として「文化の伝達」があります。

私は授業の最初に「井戸端会議」の時間を持っています。学生一人ひとりが話したい話題を紙に書いて、それと同じ話題を持っている人を探して話をするのですが、価値に関する話を求めている学生が少なくありません。そういう話が五分でもできたら、非常に楽しいというのです。しかし家庭ではできない。「忙しい」と言って、話し合う時間を持たずに大人になっている。これでいいのかということです。結局、豊かで深い意味のある価値観を伝えられない子供たちを作ってしまっているわけです。

家庭の中では良い価値観も伝わっていく

生んだから親になるのではなく、子供に人間としての精神を伝えて、価値観、文化の伝達をして初めて親になるのです。「十一の原理」の「子供を愛す」の中で「自己犠牲的な愛」と言っていますが、育てる努力や犠牲を払って初めて親になるという意味です。文化や価値を伝えた時、初めて親になるというわけです。

こうした行動が「人格を育成する家庭をつくる」ことになると考えます。

個の関係を超えた「家族」の意味

十一の項目に込められているのは、人間の尊重と人間の精神性の尊重です。さらに言うと魂の尊重

家族全員のボランティアなど対話ができる触れ合いを増やすこと

です。

人間というのは欠点があって不完全なものです。それでも人間の良いところは、今の自分より向上しようという気持ちを持っているところです。フランクル（『夜と霧』著者）はこれを「高みの出会い」と言っています。

さらに言えば、子供は家庭では育たないと称して、過去には政治思想によっては家族から子供を引き離して社会で育てようとした試みもありましたが、こうした歴史上の試みは全て失敗しました。

つまり、人間の文化の中に「子供は家庭で育つ」というものがあると考えた時、ただ「私の家族」「私の親、私の子」というだけでなく、人間の文化としての家族や親子関係は、個の関係を超えた家族という大きな意味を考えることも大切ではないかと思うのです。それが家族や親子関係の「本来の姿」になります。もちろん、そうした「本来の姿」と、各々の家族の問題は複雑で特殊なこともあるので、分けて考えなければなりません。しかし、たとえ表面上は「本来の姿」に合わない親であっても、家庭は愛情を中心にして、中核となる価値を伝えるという場は保ちます。

学校での話題を家族で話し合う

また、保護者で人格教育委員会を作るなど地域ぐるみの取り組みを進めるために、学校での話題を家族皆で話し合う機会を多く作ることも大切だと思います。環境を保全する町をどうやって作っていくかとか、地域に触れ合いの場を増やして犯罪のない社会を作っていくといったことです。

家族で話し合って、地域への愛着を持つ。それが結局、家族の愛着につながるわけです。そうした愛着を取り戻すために、価値観の対話ができる触れ合いを家庭で増やすことが大切ではないでしょうか。共に行動するということですね。どこかに一緒に遊びにいくのもいいかもしれませんが、例えば家族全員でボランティアに行くとか、家族全員で人に関わる。そして全員が同じ方向を向くということです。

伝えるべき価値観も、国や宗教を超えた共通の価値観はもちろんですが、それと共に地域に根ざした価値観、風土、土地、景色、自然、町を大切にし、その気持ちが地域の人に共有されることも大切です。

やはり単なる思いだけではなく、各家庭がきちんとプログラムを作って、例えば今月は何の話をするとか、何を育てるとか、目的をもって考えていくといいと思いますし、うまくいかない時はお互いに話し合って、こういうことを教えようとか、連携し合って子供を育てていくことが大切ではないでしょうか。

子供を躾けるということ以上に、同じ価値観、体験を共有する。場の共有、空間、時間の共有です。地域のお祭りなど有効ですね。

そして、社会に共通して認識される新しい道徳文化を作り上げることだと思います。E

死と向きあう中で生まれる親子の絆

重篤な病気で死に直面した子どもたちの不安と親たちの自責の念。その中で深まる親子、家族の絆―。小児科医の西野敬三氏に語ってもらった。

魂は人々の心に生き続けると伝える

私は小児科医として、日々病気を持つ子どもたちの診療をしているのですが、中には重篤な病気のために亡くなる子どもの診療にあたることもあります。そのような経験から感じていることを、今回はお話したいと思います。

人はなぜ、死に恐怖を感じるのでしょうか？　人が死に直面した時、最も恐れることは何でしょうか？

答えの一つは、死によって自分という存在が消えてなくなってしまう、というところにあるのではないでしょうか。死によって肉体は滅び、それを介した自分と周囲の一切の関係性は永遠に失われてしまいます。子どもの死の概念は年齢によって変化するようですが、重篤な病気の子どもたちは四歳を越えると死を自覚するといわれています。たとえ周囲の大人が秘密にしても、自分に死が近いことを悟り、死の恐怖を表現することがあります。死によって、これまで一緒に過ごしてきた両親や兄弟から自分だけが永遠に引き離されてしまうと考えると、とても寂しく、孤独で不安な感情に襲われます。私たちが何もしなければ、死に直面した子どもたちはこのような恐怖を抱いたままで放置されることになってしまいます。

子どもが病気で亡くなったとしても、親と子の思い出は各々の魂の中に永遠に生き続けていく

残念ながら避けられない死に直面した子どもに対しては、大変ですが、逃げないでその不安を共有することが重要です。そして〝両親や周りのみんなはあなたのことを愛していますよ。あなたが生きている間だけでなく、死後もずっとあなたのことを思い続けているのですよ〟というメッセージを伝えてあげたいと思うのです。死によって肉体は滅び、この世から消えてなくなってしまうことは事実ですが、亡くなった子どもの魂は周囲の人々の心の中に生き続けています。このことを子どもたちに伝えていけるよう医師として支援できればと考えています。

親は決して無力でない

親として、自分の子どもが事故や病気で死が避けられないと知ったらどうでしょう？　なぜ自分の子どもだけがこのような不幸に遭わなければならないのかと怒りの感情を持つかもしれません。絶対に認めたくないとすべてに拒否的になるかもしれません。また子どもを守れなかったと自責の念をもつこともあります。例えば、〝あのときどうして事故の現場に連れて行ってしまったのか、もし別の

ところに行っていればこのようなことにはならなかったのではないか〟〝もしもっと早く病気に気づいて治療をしてあげていれば、こんな状態にはならなかったのではないか〟などと考えてしまうのです。

そうしたとき私は、子どもを苦しめているのはけがであり、あるいは病気であり、親が自分を責めるのは不合理なことだと話すようにしています。しかし理屈ではわかっていても、親としての苦しみの感情はすぐに消えるものではなく、子どもが亡くなった後も完全に消し去ることはできないかもしれません。子どもの死とはとても厳しいものなのだと思います。

また、病気やけがで苦しんでいる、さらに悪い場合には死にゆくわが子の姿を見る時、自分は親として何もしてあげられないという無力感にさいなまれることもあります。もし子どもの病気やけがに対して有効な手だてが打てないのなら、それは現在の医学がいまだ未熟であるということであって、別に親が無力なわけではありません。親は子どもに最も近い存在として、子どもに寄り添ってあげることで愛を示すことができ、子どもの手を握って安心感を与えることができます。親は決して無力ではなく、むしろそのような行為こそが子どもから求められているのだと思います。

子が生きたあかし受け止めたい

よく人は死によって生を意識するといいます。普段は、生きるとはどういうことか、などと真剣に考えることはあまりありません。しかし死の恐怖に直面したとき、生きる意味や生きるうえで大事なことは何か、などと普段考えもしないことを考えます。切迫した事実を目の当たりにして、物事の本質を真剣に考えるようになるのです。

子どもの死は、親としては非常につらい経験です。数年の生涯なんていかにも短すぎるのですが、きっと濃密な人生を生きたのだと思います。その子どもが生きていた意味を考え、生きてきたあかしを心に受け止めてあげられたらと思います。死によって肉体的には子どもと親とが離れたとしても、両者の思い出がそれぞれの魂の中に永遠に生き続けていく。そう思うことが新たな親子や家族の絆となり、新しい人生が始まるように思います。E

日本人は偉大だ

いちばん心に響く！ 世界に誇る20人の生き方

杉原千畝　朝河貫一　織田楢次
望月カズ　野口英世　今西錦司
新渡戸稲造　鈴木大拙　新島襄
西岡京治　ラグーザ玉　ほか

学校でもちゃんと教えてほしい！日本の心

増子岳寿 著　四六判／246頁　1680円

誇りと自信が湧いてくる！

ご注文は書店へ、お急ぎの方は下記へ

コスモトゥーワン
tel.03-3988-3911 fax.03-3988-7062
http://www.cos21.com
〒171-0021 豊島区西池袋2-39-6-8F

ワールド・アフェアーズ

欧州子ども手当と「スウェーデンモデル」の失敗

英、仏では、子ども手当（児童手当）に新たに所得制限を設けるなど相次いで方針転換している。親や子どもの無気力など問題点が明らかになっているからだ。かつて「スウェーデンモデル」と賞賛されたスウェーデンでは事態はさらに深刻だ。

在仏ジャーナリスト　辰本雅哉

子ども手当で無気力蔓延

今年、英国で十三年ぶりに労働党から政権を奪還した保守党のキャメロン政権は、緊縮政策の一貫として、児童手当に所得制限を加える政策を発表した。日本の民主党政権が、子ども手当導入で最も参考にした英国の制度変更は何を意味しているのだろうか。

十月四日、オズボーン財務相は、二〇一三年以降、親一人の年収が四万四千ポンド（約五百八十万円）以上の世帯には、児童手当を支給しない政策を明らかにした。現行では所得制限がなく、最長十九歳まで受給できる。さらに大学の授業料値上げも進めている。

この発表には、保守党支持者の中にも反発の声があるものの、実は現状に国民の不満があることも否定できない。英紙デイリー・メールは、五人の子どもと暮らし、貧しいとは言えない生活を営む三十代のシングルマザーの女性の例を紹介している。

その女性は数回の離婚、結婚で三歳から十六歳までの五人の子どもがいるが、これまでに働いたことはなく、高額の美容整形手術まで受けているという。住宅手当や子ども五人分の児童手当などで毎月二千四百ポンド（約三十一万円）の収入があり、税控除などを計算すると三万九千ポンド（約五百十万円）の年収がある計算になる。

子どもはそれぞれの部屋を持ち、ヴァカンスで海外に出かけることもあるという。彼女が言うには、一度は求職活動をしたが、働く方が全体の収入が減ることが分かったので結局は働かないことに決めたそうだ。

インタビューに答えたこの女性は、多少後ろめたさを感じるものの、「どう使うかは私が決めることだ」とも主張している。同紙には、女性を批判する投書が多く寄せられたという。中には、「子育てより親の美容に多額の金が使われているのは許せない」「このような親を見て育つ子どもの将来は明るいものとはいえない」との声もあった。

一方、フランスでは今年九月の国民議会で学校をさぼる子の家庭に対し、家族手当の支給を停止する条項を含む法案を採択し、最終成立させた。所得制限がなく手厚い家族手当で知られるフランスでは、家族手当が生活費にまわされ、育児に手を抜く親も少なくない。

ドイツ同様、学費が大学まで無料のフランスでは、お金がかからない分、教育に無関心な親が多く、子のさぼりが放置される。サルコジ大統領は「働き、努力する者の金で、子育てを放棄し、努力しない者が生活している矛盾は放置で

きない」と説明している。

子どもたちは親が家族手当を受け取っていることを知っている。十六歳で家を出たパリ近郊に住むダニエル君は「親が苦労して作ったお金で養ってもらっているなら感謝もするけど、国からもらった金で、それも全部が自分のために使われていないと思うと不愉快だった」と言っている。

育児を国が引き受け 家族が崩壊

福祉大国として世界に名を馳せた北欧スウェーデンの事情はもっと深刻だ。子ども手当制度の歴史は七十年以上前にさかのぼり、戦前にはあった所得制限は今はなくなっている。国自体の貧しさとキリスト教的相互扶助精神が子ども手当のルーツだったが、今では、その精神は薄れ、受け取る権利ばかりが一人歩きしている。

スウェーデンでは戦後、女性の社会進出を促進するため、女性が育児に従事しなくとも、子どもが育つ仕組みの構築を急いだ。それは手厚い子ども手当だけでなく、「国民の家」理念のもと、育児そのものを国が引き受け、国が家族の役割を代理するようになり、結果として伝統的家族は崩壊し、家庭よりも個人単位の保障に変化した。

税制上も夫婦単位で課税されていたのが、一九七一年に個人単位に変更された。そのため夫婦という単位は希薄化し、専業主婦は極めて少なく、事実婚も多く、離婚も簡単にできるようになった。日本のように育児に専念する三十代でもスウェーデンでは、女性の労働人口の減少は統計上、まったく見られない。

シングルマザーでも働き続けることに何ら問題はないが、皮肉にも社会進出した女性たちが保育園などで働く矛盾も生んでいる。この三十年間、子育てを基本とした家族構築の意識が国民から薄れ、若者の自殺者が急増し、麻薬に溺れ、無気力感が広がり、欧州最大の犯罪大国と化してしまった。

財政健全化にも 厳しい課題が

昨年（二〇〇九年）は性犯罪の低年齢化に国民もショックを受けた。スウェーデン南部でバスに乗車中の十九歳の女性が、性的嫌がらせを受け、下車後も追いかけられ、路上でレイプされそうになったところを近所の住民がとりおさえる事件が起きた。レイプ未遂犯として逮捕されたのは十二歳の少年だった。同じ同国南部では昨年、三十件のレイプ容疑で十五歳の少年が逮捕されている。

七年前に英医学誌ランセットに掲載されたスウェーデンの調査では、単親家庭の子どもは両親のいる子どもよりもうつ病にかかりやすく、自殺や過度の飲酒、麻薬中毒になる確率が二倍以上に上ったと報告されている。綿密に行われたという同調査は、家庭崩壊が青少年の頽廃や暴力という社会崩壊に繋がっていることを示している。

福祉大国化した欧州諸国は、リーマンショックに続くギリシャ財政危機により、財政健全化のための緊縮政策実施という選択肢しか残されていない。しかし、一度与えた既得権益をどこの国民も手放そうとはしないし、個人から家庭に保障の単位を戻すのは至難の業だ。また、家族崩壊により若者の意欲が薄れ、頽廃にも歯止めがかからない状況だ。E

児童手当等の状況

イギリス
児童手当に所得制限導入（親１人の年収が約580万円以上の世帯）。
働かないほうがかえって収入が多く、一定水準の生活ができる場合があることに対して、国民の批判も。

フランス
学校をさぼる子の家庭に対して、家族手当の支給を停止。所得制限のない家族手当が生活費にまわされ、育児に手を抜く親も少なくなく、問題に。

スウェーデン
子ども手当に戦前はあった所得制限は、今はない。手厚い子ども手当だけでなく、「国民の家」理念で育児そのものを国が引き受け、結果として伝統的家族は崩壊。

国際学力テスト（PISA）
日本の15歳、「読解力」改善の兆し
「読書活動などの成果」

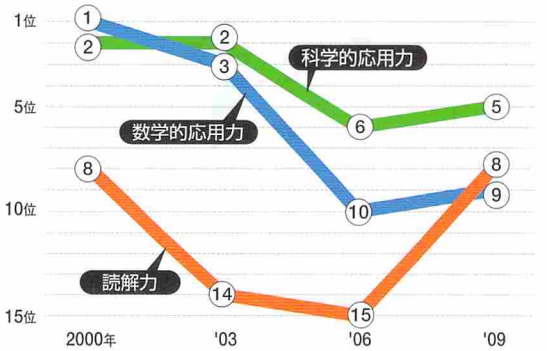
PISA平均得点

読解力	得点
1 上海	556
2 韓国	539
3 フィンランド	536
4 香港	533
5 シンガポール	526
6 カナダ	524
7 ニュージーランド	521
8 日本	520
9 オーストラリア	515
10 オランダ	508

数学的応用力	得点
1 上海	600
2 シンガポール	562
3 香港	555
4 韓国	546
5 台湾	543
6 フィンランド	541
7 リヒテンシュタイン	536
8 スイス	534
9 日本	529
10 カナダ	527

科学的応用力	得点
1 上海	575
2 フィンランド	554
3 香港	549
4 シンガポール	542
5 日本	539
6 韓国	538
7 ニュージーランド	532
8 カナダ	529
9 エストニア	528
10 オーストラリア	527

日本の順位



OECD「生徒の国際学習到達度調査（PISA）」

経済協力開発機構（OECD）の国際学力テスト「学習到達度調査」（PISA）の二〇〇九年調査で、日本（高校一年生の約六千人が参加）は、「読解力」で前回（〇六年）の十五位から八位に上昇するなど、学力改善の兆しが見られた。十二月七日に発表された。

PISAは単に知識の量を測るのではなく、その知識を実生活の中でどれだけ使えるかという応用力に主眼を置いている。調査は三年に一回行われ、今回は六十五カ国・地域の約四十七万人の十五歳男女が参加。文章を読み取る「読解力」、「数学的応用力」、「科学的応用力」の三分野で行われた。

日本は今回、読解力で八位、数学は九位、科学は五位。日本は過去の調査で、読解力が〇〇年八位、〇三年十四位、〇六年十五位で、今回は〇〇年レベルまで回復。数学は一位、六位、十位。科学は二位、二位、六位と下がり続けていたが、今回はわずかに上昇した。得点も読解力で前回を二十二点上回る五百二十点になるなど、改善の兆しが見られた。

順位が大きく低下した〇三年の「PISAショック」以降、教育界では「読解力」「考える力」を身につける取り組みに力を入れてきた。〇七年から始まった全国学力テストも、PISAを意識したものとされる。今回の結果も、読書活動など現場の取り組みの成果と見られている。

ただ、「社会生活に支障が出る」とされる低得点（レベル1以下）の生徒が、読解力で一三・六%、数学一二・五%、科学も一〇・七%に上るなど、他に比べて目立つ。

一方、初めて参加した上海が三分野すべてで一位となった他、韓国、香港、シンガポールなどアジア地域が上位に名を連ねている。

情報ファイル

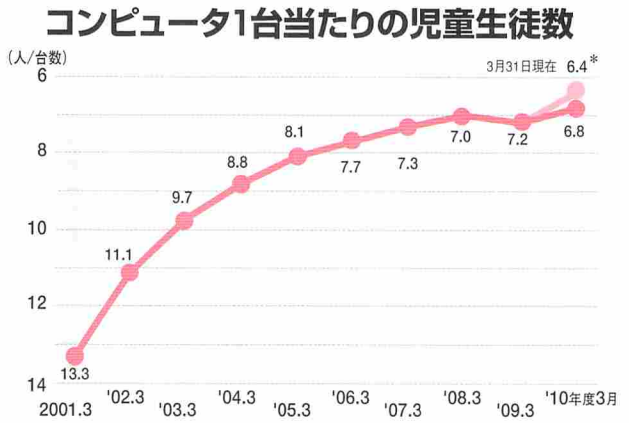
文部科学省「教育の情報化に関する実態調査」

小中学校のコンピュータ導入 6・4人に1台

電子教科書には賛否も

学校でのパソコン導入が始まって二十年。校内LANや超高速インターネット、さらに電子黒板など、このところ教育環境のデジタル化への流れが加速している。

文部科学省の「教育の情報化に関する実態調査」によると、小中学校のコンピュータ一台当たりの児童生徒数は二〇〇九年の七・二人から一〇年三月末現在六・四人と大幅に拡大した。都道府県別で見ると、最も進んでいるのは山梨県の四・二人。最も遅れているのは愛知県八・一人。学校現場でのIT格差は大きい。



＊2010年3月31日現在の数値は、3月のICT環境整備の状況調査の結果を反映させたもの

＊2010年3月31日現在の数値は、3月のICT環境整備の状況調査の結果を反映させたもの

文部科学省「平成21年度 学校における教育の情報化の実態等に関する調査結果」

さらに二〇〇三年度から小中学校で導入が始まった電子黒板は、〇九年度の補正予算計上で一気に四万台増えて、一〇年度は約五万六千台が全国の小中学校に整備された。ただ全校に整備されているわけではなく、電子黒板があるのは全小中学校の五八・八%。

また書籍の電子化が広がり、IT先進国では学校教科書の電子化に取り組み始めた。米国では二〇〇九年七月から電子教科書の導入の試みが開始、韓国では一一年度から、全国の小学校で電子教科書が義務化されるという。

一方、日本は、政府が「二〇一五年までに電子教科書を全小中学校の児童生徒に配備」という目標を打ち出したことで、学校教育のデジタル化に加速が掛かってきた。

ただ、電子教科書に対して保護者の間には「子供が勉強に興味をもつと思う」「学習効果があがる」との期待感がある一方、「紙の教科書の方が学習効果はある」「子供の人格形成上悪い影響がある」といった反対意見もある。また、情報量拡大のスピードに紙では間に合わない、映像で見れば一瞬で理解できることが紙では時間がかかる、あとはコンテンツの問題といった声もある。一一年度から全面改訂される小学校の教科書では、電子教科書が数多く登場する見込みだ。

オピニオン

哲学を学ぶ教育の土壌つくろう

――大学は知の主戦場であれ

教育が、創造的で知的に活力ある人間を育てるようになっていない。大学では哲学や宗教の講座も少なくなっている。もっと「知の冒険者」を生む教育の土壌が必要ではないか。

子供を知の冒険家に変えた教師

教室は、自分の番がきたとばかり立ち上がって大声で自分の意見を述べる生徒。その声をもかき消すように「先生、先生！」と自分の番をせがむ子供たち。ひなが親鳥にえさをせがむ時の声のような、生命がはじける子供たちの声。

これは小学校の理科の教室。静岡県、伊豆の山あいにある小さな温泉町修善寺。教師の名は石井清。

先生はヒントを与えるが答えは出さず、子供たちの手が届きそうな疑問を投げかける。生徒の顔は知の冒険家、探検家の顔に変わり、小さな頭の中の想像力と創造力がフル回転する。口角泡を飛ばす議論をはじめ、その中ではっとアイデアが閃く。どんなちいさなことでも、自分が発見したことが限りなくうれしく、自分の中の「天才」に驚く。

先生は一人ひとりの意見を丁寧に聞きながら、さらに質問する。荒唐無稽なアイデアや、破天荒の論理の展開。創造力と想像力の渦巻く教室。先生は生徒の発見をうまく使いながら、そこにさりげなく説明を加える。

これは何十年も前、私が小学生だったときの体験である。学ぶことがこれほど楽しかったことはその後一度も無かった。「勉強が楽しい」ことを身体で感じさせ、議論の醍醐味を味わわせてくれた。人知れぬ田舎町の、無名の教師の授業が、何人の知的人生を変えただろうか。私は石井清先生を無条件で最高の先生だったと感謝している。その後、中学でも、高校でも、大学でも、目を開かれる授業はなかった。むしろ自分で読む本の中から、著者の情熱を感じながらそれぞれの学の本質、その喜びを学んでいった。

その後、アメリカの大学院で、後期ハイデッガーの碩学である故ライナー・シュルマンの授業で「哲学の真理が見出される現場」で学ぶことができた。本に書いてあるようなことは一切説明しない。「自分で読め」ということである。授業は、書いてあることの一歩先からはじまる。教師は、自分の見出したことを生徒に投げかける。生徒といっても、ニューヨーク近辺の他大学の哲学の教授が何人も混じっている。議論と沈黙が入り混じり、教師は何かを発見すると、すぐ自分のノートに書き加える。

哲学専攻の駆け出しの院生には、入る隙間のないような最先端の議論には、理解を越えたものが多かったが、それでも思考の限界を突き破る緊張感と臨場感は魅力的だった。研修者を育てるにはこういう環境が必要で、大学院にはこうい

野田啓介

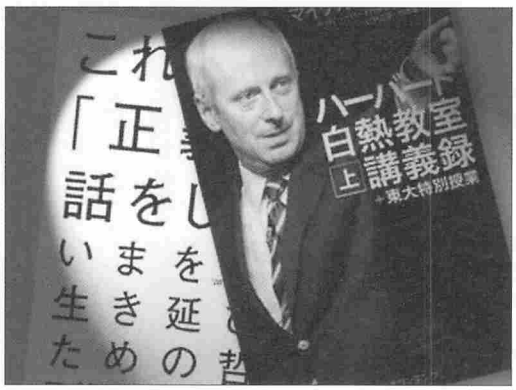
米ＵＴＳ准教授。Ph.D.（哲学博士）、ニューヨーク在住。著書に『それでも僕は生きてゆく：正常な人ほど自殺を考える』（アートヴィレッジ、2010年）『小説哲学史』上下（太陽書房、2004年）

う授業が少なくない。

大学から哲学講座が少なくなっている

恐れずに果敢に問い、知の冒険者、探検家となること。ここに学の醍醐味がある。見方が変わり、新しい視野、解釈の地平が開ける。教育の「育」には、自分自ら考える人間を育てることが含まれる。日本の教育現場では、深く、多角的に、しかも創造的に考えることよりも、知を機能的に使い、効率的に処理することが求められてきたように思う。大学から哲学、宗教の講座が少なくなっている現実は、その証左である。

ことに道徳的なことがら、人生の意味や生き方に関わる諸問題は、深く総合的に考えることが必要であり、ただ記憶したり計算したりする力だけではどうにもならない。哲学は、究極的な問題を投げかけることによって、偏見や、盲目的な思い込みを問い、その人自身の「答え」を求める。



人生のあらゆる問題に疑問が噴出する大学の時期に哲学や宗教を学ぶ意味は大きい

生きる意味を切実に求め、時には自殺すら思う多感な青年をテーマに『それでも僕は生きてゆく：正常な人ほど自殺を考える』という思想小説を書いたのも、こうした状況への私の小さな抵抗である。

NHKで放映されたマイケル・サンデル教授の白熱討論が話題になっている。伝統的な正議論を日常的な問題に結び付けて聴衆に問い、「考えること」を刺激的に促してゆくスタイルが注目を集めた。裁判員制度が導入され、一人ひとりが法の解釈と道徳的判断を求められている現在、「正義について考えさせる」授業はタイムリーである。

民主主義の法治国家でありながら、「お上におまかせ」の体質が染み渡った日本の社会は、一人ひとりが法の解釈と適用をすることを迫られている。人の運命がかかった裁判という場では、倫理や価値が法に絡み合った形で提示され「考えること」を他の誰に任せることもできない。

大学で哲学や宗教学ぶ意味

日本は、形は民主主義ではあるが、内実は封建社会、「お上におまかせ」の追従体質が色濃い。教育も「追従型」の人間を育て、創造的で真に知的な活力を育てるようにはなっていない。いや、そうした「変わった教師」は生存できないシステムと、そうした教師を育てない教師育成過程があるのかもしれない。

多民族、多宗教、多文化社会では法による統治しかない。行き過ぎの観もあるが、アメリカが市民レベルで法にかかわっている理由はここにある。やがて日本も無縁ではなくなるだろう。

大学は、学生が知の可能性と限界に挑戦する知の主戦場であるべきである。知の究極的な臨界線をたどる哲学や宗教は、人間が誰でも直面せざるを得ない問題を投げかける。最も多感で、人生のあらゆる問題に疑問が噴出する大学の時期に、哲学や宗教を学ぶ意味はここにある。

日本からは、人文科学社会科学において、世界をリードするような画期的な理論が生まれていない。日本が文化的な生産国となってゆく為には、知の冒険者を生む教育の土壌が必要ではないだろうか。しかも知の挑戦は、知の喜びを教えてくれる。「学の源泉は驚きである」と言ったアリストテレスは慧眼である。E

発言

親子の絆が子どもの社会化の力養う

～子育てカウンセリング～

生活まるごと人間形成だった三世代家族が減少。秩序が弱くなりやすい核家族の中で、父母は子どもをしっかりと抱きとめ、親子の絆を培いたい。それが社会化の力になる。

家庭には最小限の秩序が必要

情報化社会の進歩は目覚ましく、物は豊かになった。しかし一方で、心の貧しさが目立つ。自制心に乏しく、人に対する思いやりの心が薄れた若者が目立つのも確かだ。社会・家庭の道徳的秩序の崩壊、犯罪の増加、性倫理の無秩序などの問題もある。これらは特に家庭の倫理に深い溝ができているからではないか。

家庭の教育力、地域社会の教育力の低下による複合汚染が、子どもに無責任、無感動、無気力、無関心を蔓延させ、ひいては人間関係をも蝕んできたのだと思う。

さて、家庭とは家系を引き継ぐ過程を通して、家族と血族が幾代にもわたり続いていくのである。つまり、誰もが家庭で生まれ、家庭で育ち、家庭で息を引き取る。祖父母、父母、そして子どもという基本型の三世代から構成され、一つの屋根の下で眠り、お互い喜びと苦痛を共に分かち合って一生を過ごしている。これが人の道であり、天の道であると思われる。

父母の上に祖父母がおられ、先祖があり、ある家庭では天や神もいる。これらの家族は血縁関係によって構成され、自然に最も親密な関係を維持するようになる。

家庭には最小限度の秩序が必要である。父母と子どもの間にはもちろん、夫と妻、そして兄弟間にも秩序があり、家族間で互いに尊敬し合わなければならないし、互いの成長と物事の成就のためにも助け合わなければならない。幸福で和やかな家庭とそうでない家庭の違いは、こうした家庭内の関係から始まると思われる。

倫理的秩序を培うためには

私は祖父母と同居する大家族世帯で育った。祖父母と父母、兄弟たちが皆一緒に暮らすことによって、家族の構成員から学ぶ倫理的秩序や互いに助け合う協調性ができ、関係性の中で幅広い人格が形成されていく。つまり「生活まるごと」人間形成に繋がると言える。

そう考えると、核家族は倫理的秩序が薄れやすく、家族関係の結束が弱くなりやすい。現代は、過去に経験したことのない豊かさの中に大人も子どもも生きていて、自分第一という個人主義的思考を持つようになった。そのため、もう

深田高一
ふかだ・こういち
産業医科大学元教授
1944年福岡県生まれ。産業医科大学教授、幼稚園園長などを務め、長年、子供たちの教育、父母の指導にあたる。医学博士。専門は大脳生理学。

一度家庭を振り返り、健全な家庭を作るためにはどうすべきかを考えなければならない。

現状の核家族に欠けている倫理的秩序を培うためには、父母として留意すべき点を自覚する必要がある。

物の豊かさと少子化家族による「過干渉ママ症候群」を患っている母親、また全く放任の「無責任ママ」も増えている。命令や干渉が多すぎると子どもの自立心や自主性は発達せず、何事にも受動的で、他者からしてもらうことは当たり前、してもらえなければ腹が立つ、こうなるのも社会が悪いといった責任転嫁や無責任感覚が芽生える。

今こそ、子どもの心の叫びを聞き届け、子どもの内発的なものを大事にする教育に一歩踏み出したいものである。親は子どもの生命の素晴らしさを認識し、人間の尊厳を理解することで歴史的存在としての人間の喜びを味わうことが出来る。

父親としても留意点は母親と同様である。父親が帰っても存在感が薄い家庭が問題とされた。父親の不在状況が日常化し過ぎたからであろう。父親は主に外で働いている割合が高いが、働く意味を通して、家庭生活を支え、家族を庇護し、その願望を叶え、妻を愛し、子どもの人格を尊重する。そして、子どもの行く末を灯台守の光のように照らし、人間としての生き方、考え方、感じ方の人生観を語り、行動することである。

基本は親子の信頼感。自分は愛されている、希望を持って生きようといった信頼感の素地が培われることだ

基本は親子の信頼感

子どもの成長・発達の過程に応じて、父母の出番が異なることを認識することが大切である。子どもにとって乳幼児期の母は共生的関係にあり、父親は遠い存在である。しかし、父親というのは子どもと母親の二人から認めてもらわなければならない孤独な存在である。実は、このことが家庭における父親の座を決定するものだと思う。

子どもの成長・発達に伴い、それぞれの発達段階での教育課題がある。要するに大人として、一人前の人格を育成するには、各段階でその年齢でしか望めない要素があり、それを積み上げていくことが大切である。基本は親子の信頼感であり、自分は愛されているか、この世界は私を歓迎してくれているか、自分は決して無力ではない、希望を持って生きようといった信頼感の素地が培われることだ。

親はしっかりとわが子を抱きとめ、社会化への素地を培う役割を果たすことである。親子の絆が培われると、豊かな感性、感受性、知識欲が旺盛になり、更に意欲、態度を大切にして、判断力、表現力など、社会の変化に対応する力を身に付けることが出来ると思う。E

ルイ・パスツール（1822～1895）

半身不随にも耐え抜いた「近代細菌学の開祖」

半身不随となっても前にも増して研究活動に専念し、数々の偉業を残す。

ジャーナリスト 池永達夫

最初は「ただの秀才」

ロベルト・コッホとともに「近代細菌学の開祖」とされるルイ・パスツールは、天才肌の研究家として若いときからバリバリ実績を上げたわけではなかった。むしろ周りからはただの秀才として見られたふしがある。

パスツールは皮なめし職人を父として、フランスのジュラ地方ドールで生まれた。秀才のパスツールは、パリの高等師範学校（エコール・ノルマル・シュペリウール）で学び博士号を取得する。この頃には、周囲が注目せざるを得ないような才能も垣間見られないまま、学生時代を終えている。

パスツールは後、アカデミズムのパイオニアとして、とりわけ医療の世界で新たな新天地を切り開くことになるが、順風満帆のエリートコースのレールを走ったわけでは決してなかった。

アカデミズムは徒弟制度にも似た世界だ。初めから名門大学の准教授に抜擢されるのは、よほど担当教授から才能を見込まれなければなれるものではない。天才肌ではなく、ただの秀才だったパスツールは、地方大学の教職を転々と渡り歩いた。

低温殺菌法を開発

地方大学で教えていると当然、地場産業界からいろいろ相談を持ちかけられることになる。パスツールが後、アカデミズムで頭角を現すことになるのは、この相談を真摯に受け止め、愚直に解決の道を探ったことに端を発する。

なだらかな丘陵地帯が多いフランスの特産物といえばワインだが、地場産業界の悩みの種はブドウ酒の大量酸敗問題だった。せっかくブドウの収穫を済ませ、ワインを製造しても出荷段階前にアルコール分が酢酸発酵を起こして酢に変化、商品が台無しになるケースがしばしば起こっていたのだ。

パスツールは、まずアルコール発酵が酵母菌の働きによること、さらに酢酸発酵が他の微生物の働きによることを確認した。その上で、葡萄酒の悪化を防ぐために低温殺菌法開発に成功する。低温殺菌法とは六三度を三十分保つ手法をとる。この低温殺菌だと酵母菌は生き残ってブドウ果汁の発酵には差し支えないが、酢酸発酵の元となる他の病原菌などは死滅させ、アルコールが発酵し酢になる酢酸発酵の被害を止めた。この手法は、今でも牛乳などの殺菌手段として使われているものだ。

ともあれ一躍、パスツールは地場産業の難局を解決した〝救世主〟に躍り出ることになった。

さらにパスツールの下に、次の仕事が振られた。このころ、農家が飼っている蚕が伝染病にかかり大量に死滅するケースが目立ち、こ

ルイ・パスツール＝ROGER_VIOLLET

の解決を求められたのだ。

パスツールはこの蚕病に取り組んでいた最中、脳内出血を起こした。一命こそとりとめたものの、パスツールは半身不随の身となった。低温殺菌法を編み出して社会的評価が定まり、これからの研究成果が期待されていたが、その全盛期に体の自由を奪われた。

だが、パスツールは研究を断念しなかったばかりか、体を縄で縛られるような不自由な生活にも耐え、前にも増して研究活動に専念するようになった。たまたま脳内出血を起こした箇所が、言語や論理思考の活動拠点となる左脳ではなく、右脳だったことが幸いした。

パスツールは一時中断を余儀なくされた蚕の微粒子病にも再び取り組み、ついに微粒子病がカイコの卵へのノゼマと呼ばれる原生生物の感染であることをつきとめた。感染源を特定できれば、防止策を発見するのはたやすいことだった。こうして微粒子病防止の手立てを確立したパスツールは、ワイン業者だけでなくシルク産業の〝救世主〟にもなっていった。

ともあれパスツールの偉業の数々は、脳出血に倒れた後、半身不随の後遺症を抱えながらの苦渋の研究生活であげた実績だった。

パスツールの功績の一つは、ワクチンによる予防接種という方法を確立し、狂犬病ワクチンや鶏コレラワクチンを発明したことだ。ワクチンの予防接種というのは、弱い病原体を接種することで免疫力をつけることで、強い病原体に対する抵抗力をつけるものだ。毒を以って毒を制すワクチンの予防接種で、人類は感染症に対する強力な武器を手にすることが可能になった。

「幸運の女神は準備した人に」

パスツールは「幸運の神様は、常に準備した人にのみ訪れる」という箴言を残した。

平凡な秀才が、世紀の事業を成し遂げるには、ただチャンスに恵まれるだけでなく、日々の積み上げが必要だった。平凡な日々の準備こそが、チャンスの翼を得て上昇気流に乗り、非凡な天空の高みへと舞い上がることが可能なのだ。E

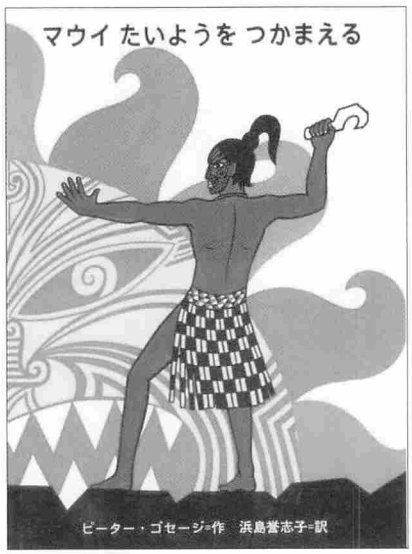
子育ては＊絵本で＊大丈夫（だいじょうぶ）

＊5

浜島代志子
劇団天童／
天童芸術学校代表

他のために生きたマウイ、究極の愛

「マウイ　たいようをつかまえる」～マオリ族の神話～



「マウイ　たいようをつかまえる」ピーター・ゴセージ/作
浜島代志子／訳

この絵本に出会ったのは、ニュージーランドに行ったときのことです。ニュージーランドと交流をしていらっしゃる飯沼先生（松戸・幼稚園長）のご紹介でした。娘二人を連れ北島、南島の大学、小学校、幼稚園等を訪れて人形劇、紙芝居、語り芝居等を演じて交流したのです。大学の先生方のお宅にホームステイさせていただき、とても、楽しかったです。

偕成社の社長さん（当時）にお見せしたら「すごい迫力ですね。浜島さんが持ってくる絵本はいつもちょっと変わってますね」売れるかな…と、ちょっと心配なご様子でしたが、翻訳させて戴き日の目を見たのです。

◇　◇　◇

むかし、太陽は出たかと思うと瞬く間に沈んでしまいました。マウイは、太陽をつかまえる旅に出ます。初めはイヤがっていた兄さん達も協力、ついに太陽をつかまえ、ゆっくり動かすことに成功！

マウイはマオリ族の英雄。マウイ成功の陰にカギがありました。それは、おじいさんのあごの骨を持って行ったからです。おじいさんは、三代の一番上、つまり、おじいさん、おばあさんは孫を守り導くのだということを教えてくれます。三代の一番上は神様に匹敵すると言われます。じじ、ばば族、うかうかしていられませんね。

◇　◇　◇

ニュージーランドではこの物語を子ども達に伝えています。日本では我が国の民話、神話が教科書にもほとんど登場しないせいか、子ども達も親御さんも知りません。コマッタなと思います。日本の神話を子ども達に伝えてゆくことが大人の大切な役割ですね。

人形劇で上演し、対話式絵本読み語りをし、他のために生きる愛を感動の中で語り続けてきた絵本、残念ながら絶版。再版できるといいのに…。

骨太で芯のある絵本は、生の声で語り、売れない限り生き残るのは難しい時代。大人が本気で絵本読み語りをすることが求められています。平成の「赤い鳥運動」「絵本で子育て救急隊」活動を続ける方、ご連絡くださいな。E

浜島さんは語り・読み聞かせの実演も行っていますので、同事務所までお問い合わせください。電話&ファックス〇四七・七〇三・七九三二、URL http://gekidantendou.com

教育・家庭情報

10代の妊娠中絶、7年連続で減少

要因は女性人口減少とピルの利用

人工妊娠中絶件数が二〇〇二年度以降、七年連続で減少し続けている。厚生労働省の「保健・衛生行政業務報告」によると、〇九年度の妊娠中絶件数は二十二万千九百八十件で、前年度より二万三百四十六件（八・四％減）減少した。また十代では二万千四十三件で、同じく千七百九十四件（七・九％減）減少。とくに十代の減少幅は大きく、この十年で妊娠中絶件数は半減している。

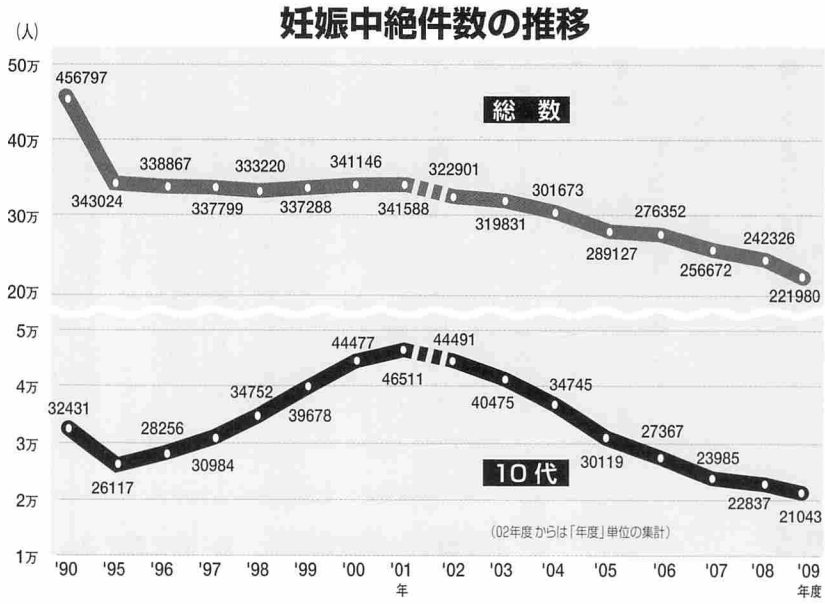
中絶の実施率（十五～四十九歳の女子人口千人当たり）は八・二（前年度比〇・六ポイント減）、十代では七・一（同〇・五ポイント減）だった。

妊娠中絶件数が減っているのは、出産期にある女性人口の減少とともに、ピルの利用率が上昇したことが大きな要因として挙げられている。決して若者の性行動が抑制されたからではないというわけだ。むしろ、若者の性行動の乱れに歯止めがきかない状況だ。東京都幼小中高心性教育研究会（都性研）の二〇〇八年調査によると、高校三年男子の性交経験率は四七・三％、女子では四六・五％。三年前の〇五年調査より大幅に上昇し、高校三年生の約二人に一人の割合だ。

実際、性行為で感染するＨＰＶ（ヒトパピローマウィルス）が主たる原因で発症する子宮頸がんは、一九九九年以降急速に増加。政府は毎年一万五千人発症する子宮頸がん対策に乗り出し、中学生にワクチンの無料接種を義務化する動きさえ出ている。

日本は先進国で唯一、ＨＩＶ（エイズウィルス）感染者が増加している。これまでピルやコンドームによるエイズ対策を行ってきたが、ＨＩＶ感染者数、エイズ患者数いずれも過去最多を更新し続けている。

エイズ対策同様、性行動の抑制につながらない子宮頸がん対策は子供を守ることにはならない。Ｅ



厚生労働省「平成21年度 保健・衛生行政業務報告（衛生行政報告例）結果の概況」

子どもは茶の間で育つ
―教育再生は家庭から

棚橋嘉勝著／アートヴィレッジ／一三六五円（税込）

家庭の中心「茶の間」の教育力

中高一貫校の校長など長年、学校教育現場で歩んできた著者が訴えるのは、「茶の間」からの教育改革。

茶の間は家族が憩う「談話室」であり、子どもにとって人生を勉強する「教室」だった。そこで共に時間を過ごすことで家族の絆も深まっていたという。今、その光景が消え、子どもたちの孤食が増えたのは、まさに家庭崩壊の象徴的な姿と言える。

本書では、父親と母親、祖父母の役割、本好きの子どもに育てること、携帯電話問題、食育、子どもがいじめにあった時の対応、家庭での宗教教育など、幅広いテーマが著者の体験を踏まえて分かりやすく語られている。

この中で特に印象的な箇所は、一つは「子育て文化の継承」ということだ。幕末から明治にかけて日本を訪れた外国人の多くが、子どもたちが大切にされ、自由で楽しそうに育っていることに驚いたという。著者は、幼い頃は自由に遊ばせ、少しずつ世の中の約束事を教えてしつけていった、伝統的な子育て文化を継承する必要があると語る。

また、「家庭で宗教性を養うこと」の大切さを語った章では、お寺での様々な出会いが述べられており、宗教心を忘れては人は育たないと感じさせられる。著者は「祈りは私たちの心を集中させ、行動を正してくれます。…それが人間の自然な感性なのでしょう」と述べ、具体的な形で宗教心を養う教育を行うべきだと訴えている。

■読者の声

本物は何かを教えてくれる

元校長（鳥取県）

毎回ありがとうございます。「圓一」は、今の日本に、そして日本人に、本物は何かを教える尊い本です。大変役に立ちます。新任教師育成の資料として活用しています。

子供たちのために実践していきたい

教師（和歌山県）

12月号の倉沢宰先生「利他の精神に出会う体験教育を」、中山尚夫先生「子宮頸がんワクチンへの疑問」など、信念をもった皆様の主張に感謝しております。子供たちのために、前を向いて実践していきたいと思います。

「魂の教育」とは何か

人格教育では、子供たちが教師や父母など模範となる人の人格に触れて良い影響を受けることが大切です。また、「人格」の語源には「魂に刻まれたもの」という意味があります。「魂の教育」は人格の核心とも言える魂の無限の可能性に気づき、その魂を強めていくこと、あるいは子供たちが自己の内面の価値に目覚めて人格の形成をなすことだと考えます。例えば、「大自然に大いなるものの存在を感じる」と言いますが、そうした無限の価値、意識のようなものを自分自身の中に見出すことだと言うこともできるでしょう。

■表紙写真　冬の鳥たち（岩手県盛岡市）
撮影・大塚克己

フィルタリング解除に制限を

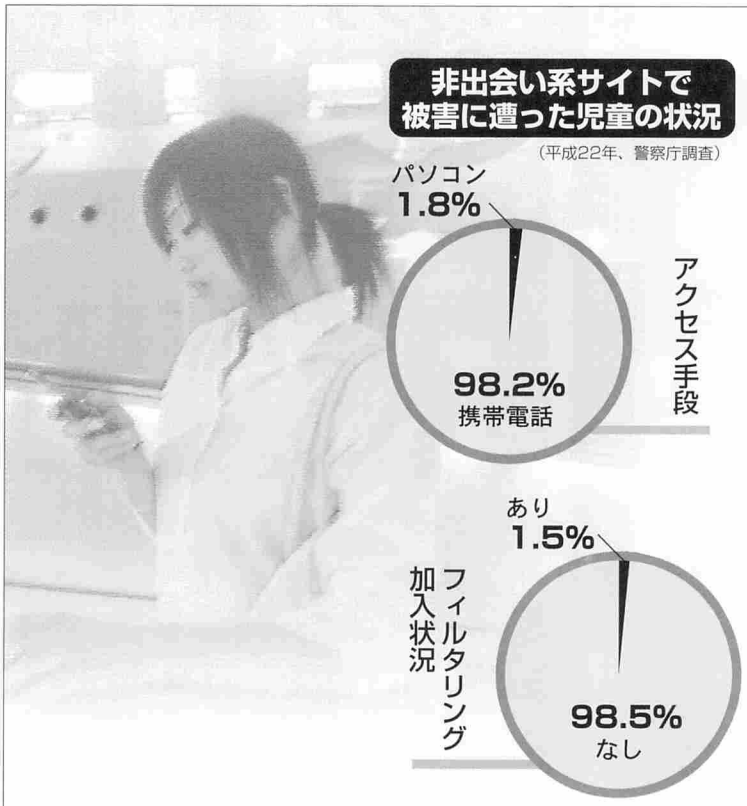
ネット上の出会い系サイトに対する規制が厳しくなった反面、プロフやゲームなどの「非出会い系サイト」に接続した未成年者が犯罪に巻き込まれる被害が増えています。そのほとんどは、有害情報を遮断するフィルタリングを導入していないケータイから接続して被害に遭っています。保護者は子供たちのケータイ利用について、もっと注意を払うべきでしょう。

現在、十八歳未満が使うケータイには、法律でフィルタリングを提供することが業者に義務付けられています。しかし、内閣府が今年四月に発表した調査によると、十八歳未満が使用するケータイへのフィルタリング普及率は五〇%を下回りました。

その背景には、現在の法律が、保護者の承諾があれば、フィルタリングを解除することを認めていることがあります。解除理由に制限がないため、子供の言いなりになって、安易に解除する保護者が多いのです。警察庁の統計では、非出会い系サイトを利用して犯罪被害に遭った未成年者のうち、九八・五%はフィルタリングを導入していませんでした。

子供の犯罪被害を防ぐためには、まず保護者がケータイ利用の危険性を知って、フィルタリングの解除に応じないようにすることが肝要です。特別な理由がない限り、解除を認めないように法改正することも検討すべきです。

また、非出会い系サイトの健全性を確保する努力も重要です。現在はサイト運営会社などでつくる「モバイルコンテンツ審査・運用監視機構」がサイトの内容を審査し、「健全」と認定すればフィルタリングの対象外となります。しかし、「健全」と認定されたサイトの三分の一が犯罪の舞台になっていたという統計もあります。こうしたサイトの犯罪利用を防止するには、「健全」の基準が適切かどうかも検討しなおす必要があるでしょう。



毎月第3日曜日は「家庭の日」
11月第3日曜日は「家族の日」

「家庭の日」は、社団法人「青少年育成国民会議」が進めてきた「家庭の日」運動に端を発し、今ではほとんどの自治体が、第三日曜日を「家庭の日」に定めています。さらに政府は十月の第三日曜日を「家族の日」、その前後一週間は「家庭の週間」として定めました。この日を機会に、家族の強い絆を確認できれば、それは家族みんなへの素敵なプレゼントになるでしょう。

家庭は愛の学校

真の家庭運動推進協議会

The Association for the Promotion of True Families

〒160-0022 東京都新宿区新宿5-13-2 成約ビル4F
電話03(6457)7760 FAX03(6457)7761 http://www.aptf.gr.jp

●皆様の御意見や気づいたことをお寄せ下さい。 教育問題に関して、皆様の身の回りでの様々な出来事や御意見などを真の家庭運動推進協議会本部までお寄せ下さい。お寄せいただいたものを参考にしながら、皆様と共によりよい教育環境や家庭づくりに取り組んでいきたいと考えています。

圓一
第3種郵便物認可
2011年1月10日発行
毎月10日発行・通巻248号

歴史と伝統の探訪

シーボルトと日本、オランダ／長崎

（左上より時計回りに）シーボルト像。シーボルト宅跡、後方に見えるのがシーボルト記念館（長崎市鳴滝）。復元された出島（長崎市出島町）

江戸時代、海外との窓口だった長崎。特に交流が盛んだったのがオランダで、多くの物資、文化がオランダからもたらされた。その中で、大きな足跡を残したのがシーボルト（一七九六～一八六六）だ。

シーボルトは、ドイツ・ヴュルツブルクの医者の家庭に生まれ、一八二三年、長崎・出島のオランダ商館医として来日。西洋の進んだ学問を学ぶために各地から集まっていた医師らに、医学や植物学を講義した。また、外国人が居留していた出島から自由に出ることを許され、町で人々の診察をして評判になった。また、日本人女性の滝と結婚し、娘いねが生まれた。

さらにシーボルトは「鳴滝塾」を開き、医師らに医学や博物学などを教えた。塾生の中には、日本の開国を説いた高野長英などもいた。塾生はその後、各地で活躍。鳴滝塾は日本の近代化に貢献することになる。

一方でシーボルトは、日本の歴史や地理、言語、動植物など日本研究に取り組んだ。各地の動植物を採取したり、気候などを調査。シーボルト事件で国外追放となってオランダに帰国後は、本格的な研究書『日本』や『日本動物誌』『日本植物誌』を出版し、日本を広くヨーロッパに紹介する。また、日本の開国を働きかけ、ペリーには日本の資料を提供して、軍事的な行動をとらないよう要請したという。

シーボルトは帰国後も、日本に残した滝と娘いねの安否を気遣っていた。アジサイの花の学名も、滝にちなんで、「ハイドランゲア・オタクサ」と名付けている。

死の直前まで日本研究を続けたシーボルト。日本の近代化と国際交流に大きな影響を与えた。E

2011
1
no.248
En-ichi
●発行所
NCU-NEWS
（東西南北統一運動国民連合）
代表 河部利夫
〒160-0022
東京都新宿区新宿5-13-2
成約ビル2F
TEL.03(5362)0631
FAX.03(3354)5017
E-mail news@en-ichi.org
URL http://www.en-ichi.org
●発行人 渡辺久義
京都大学名誉教授
定価 400円
[1年間5000円(送料込み)]
郵便振替番号
00160-3-667291
●本誌に対するご意見、ご感想をお寄せください。
●定期購読のお申し込みは、電話またはEメールでどうぞ。